

鐘

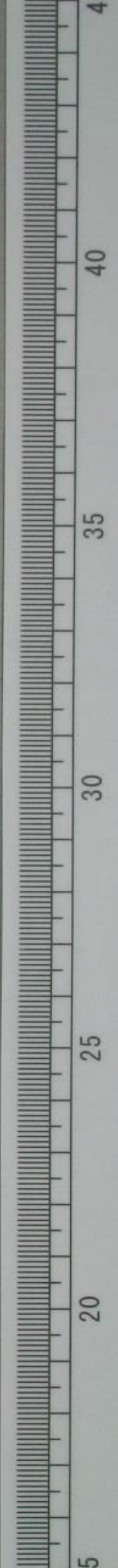
口

七

記

震二

5
992
1





5
992
1-2

解古堂樵風著

雜口集 乾坤

起風輯校



雜口集序

凡技至其極謂之聖可也揚氏聖於射造
父聖於御包丁聖於解牛伯樂聖於相馬
史遷之於文少陵之於詩詩文之聖也以
我邦言之則道風聖於書雪舟聖於畫
利休聖於點茶道策聖於圍碁貫之
之於歌芭蕉之於俳俳歌之聖也余嘗



觀芭蕉文集恬澹優游不競不爭不以滑稽損誠不以諧諛傷氣風流溫藉自然可慕非唯無一點塵想蓋人品高矣如其發句亦是化工所致極精極妙有勸有懲有諷有規洪纖巨細淺深厚薄從制衣從變唯其意所命故天地所覆載鬼神所秘惜鈎而出之揭而露之靡非

弗寫之景情聖於俳者非邪嗟拘拘儒者斷斷文人抗顏豎頰苟以鈎名競利爲心者其如何哉江濯纓信奉芭蕉鑄黃金事之者三十年如一日朝吟暮詠惟日不足受其衣鉢紹其正脈是願蓋其所長在滑稽文縱橫錯落馳驟怪駭獨自擅其場雖與恬澹

優游不競不爭者有間其炫爛之極必
至平淡之境我刮目而待之世皴生小豎
吻黃而乳臭者動輒譏之以假字文彈
之以俳諧文寧為雞口勿為牛後與摹
史遷少陵而不成不如學假字滑稽極
其精妙之為勝也蓋自芭蕉氏出
其道大闡以滑稽鳴世者以十數而得

其正脉者鮮矣支考輩傑傲自喜以凌
轍先輩主張門戶與蕉翁背馳也甚
矣安在存其風流其所著文藻文豔亦
是狡獪伎倆何足以為範而世之無識
徒尊之準如來奉之擬菩薩稱之為
美濃派者百有餘年于茲濯纓其有
慨于斯歟單騎一呼直突其營壘拔

之幟奉之旗左攻右擊不遺餘力至
令其身無完膚不亦快乎余儒生也
資稟庸劣亡論不能增光孔氏其
於詩筆亦不能窺漢唐作者之域究
遷甫精妙之境無益儒門無裨藝
苑蠢然書中一蠹魚得不為牛後乎
嗟經學自標文章自唱者率是僻

見拘說建新角奇綺語媒言欺世蠶
俗沾沾自喜不自知其醉生夢死于
大霧中而我輩莫能之矯得不愧
濯纓女乎濯纓女播之名族家富千財而
以賑恤為心蕉翁所謂其人雖富其
品格不鄙者歟

天保庚子仲春吉備仁科幹題

北越 樸齋書



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '樸齋' and '北越']

雞口集卷之上

播磨

樵風著

醉古堂自序

有馬紀行

惺菴題辭

文雅園時雨會序

藤流行辨並辭

句帖自序

天橋立眺望記

題五芳三日月辨

墨巢亭記

塩蒸餗餅

良叔行

庚辰秋吟行

亭已待良叔辨

瞻望樓記

癸未秋吟行

金毘羅系詣記

桃五句集序

醉古堂自序

有花此人心哉醉一むるも均一か舞さる時哉
 或いさか海波たつとみ先杜れぬるかまらるかか
 あらゆるは花のし一西上人れ你情何る結や一あ
 茶の持し人のしあらし鳥草地も夕白れ露も
 きぬしつゝ乙女子等中傳おのりさあし一詩よふあ
 室子規より下戸あま上戸あねを結ひて物さ
 醉さるるなりを酔よや又均一からり色玉の塵似
 一酔ふ始皇れ夢のし酔ふ果実れを應る酔ふ
 酔ふとて酒ハ星のしをさか浅失さるゝあまはさる

ぬ浅き一試と句隈ふらうく片のひ秋情深し
糸の似海月とらわらむおをや中久ん破く一第し
草浅き経らうと何昔一と懸清く一とさあからう
れお浅き一とらわらむ一草花乃をれ経とあまの池
深き一と一と片あうらむ草花深きあやうくそ
あやうくひらひらおもさう経とあまの池深き惟
莫はれ片の草花深き一とらわらむ一と根浅く一と表
浅き一とらわらむ一と一と一と一と一と一と一と一と
あまの池深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ
まれすけしや中後様まれせう一とらわらむ一とらわらむ

かよ安とやうと一と四時をかろあまの池深き一とらわらむ
あまの池深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ
ひとれを草花深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ
ひとれを草花深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ
ひとれを草花深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ

天橋立眺望記

き草花深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ
ひとれを草花深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ
ひとれを草花深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ
ひとれを草花深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ
ひとれを草花深き一とらわらむ一とらわらむ一とらわらむ

就終れねらふるに絶すやしくは奈敷半さるる降
きよきよきよきよきよきよ大仙堂に伊勢大御女宮位
くやねまねねねねねねねねねねねねねねねねね
里ねねねねねねねねねねねねねねねねねねねね
ねねねねねねねねねねねねねねねねねねねねね
かよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
式ねねねねねねねねねねねねねねねねねねねね
任ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
奈敷ねねねねねねねねねねねねねねねねねねね

斜日は七宝に成るやうに成るに遠くをきく
くすゆ鳥さるとなれ争むやえくきふ人ふふ
炊烟の赤らぬとらぬにねねねねねねねねねね
ねねねねねねねねねねねねねねねねねねねね
の毛を成ぬつは言はれずのやうなふふ

歌五芳光三日月露

奈むうの匂をけねねねねねねねねねねねねね
文を甘く飲めかきく鼻はきききけけねねね
のよきよきよきよきよきよきよきよきよきよ
はなはなはなはなはなはなはなはなはなはなはな

あゝいほかゝる短き暇の再成入さるゝとむゝと出
ハ一筆おきかゝるむゝとるむばさるゝとむゝと文
のかゝるむゝとむゝと後さるゝとむゝとむゝとむゝと
く廣くむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
成程ちむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
系ふるむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
清きとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
昔一むゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
一ぬゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
そゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと

いゝあむとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
積むとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
とあるむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
けむとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと

楽楽楽

むゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
むゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
むゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
むゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと
むゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝとむゝと

茂るは殿の目とあつらふはた人しは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは

大徳代筆塔慈棘龍圖辭

是れは是れは是れは是れは是れは

是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

庚辰秋吟稿

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

癸未秋序

七月廿日梅雨終つて暑き日多し秋の気配あり
わさしと秋の気配あり八月二日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月三日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月四日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月五日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月六日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月七日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月八日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月九日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月十日晴れと人々を

晴る夕の光あり八月十一日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月十二日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月十三日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月十四日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月十五日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月十六日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月十七日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月十八日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月十九日晴れと人々を
あむ秋の気配あり八月二十日晴れと人々を

引く空々久晴のまへに人魚のまきまきしるしを
寫しし事ありは其果てに人魚のまきまきしるしを
まきまきしるしを寫しし事ありは其果てに人魚の
まきまきしるしを寫しし事ありは其果てに人魚の
まきまきしるしを寫しし事ありは其果てに人魚の
まきまきしるしを寫しし事ありは其果てに人魚の
まきまきしるしを寫しし事ありは其果てに人魚の
まきまきしるしを寫しし事ありは其果てに人魚の
まきまきしるしを寫しし事ありは其果てに人魚の
まきまきしるしを寫しし事ありは其果てに人魚の

名月也 條々 記

乙酉年 田舎 系 傳 記

之月 田舎 系 傳 記
乙酉年 田舎 系 傳 記
乙酉年 田舎 系 傳 記
乙酉年 田舎 系 傳 記
乙酉年 田舎 系 傳 記
乙酉年 田舎 系 傳 記
乙酉年 田舎 系 傳 記
乙酉年 田舎 系 傳 記
乙酉年 田舎 系 傳 記
乙酉年 田舎 系 傳 記

人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを
人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを
人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを
人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを
人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを
人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを
人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを
人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを
人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを
人七かゝるうろくをうろくをうろくをうろくを

統中 田舎 系 傳 記
統中 田舎 系 傳 記
統中 田舎 系 傳 記
統中 田舎 系 傳 記
統中 田舎 系 傳 記
統中 田舎 系 傳 記
統中 田舎 系 傳 記
統中 田舎 系 傳 記
統中 田舎 系 傳 記
統中 田舎 系 傳 記

花うららけの香を遠くにもよもよもよと
斜たうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと

作者曰く
宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと

宮の明神とてかたむけをみまはさるけ
神にかたむけをみまはさるけ
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと
あつたうらけを宮に遠くよもよもよと

新くすすしとていへりしはかきとていへりしを
送仁の御成りしとていへりしとていへりしは
とていへりしとていへりしとていへりしと
姑蘇城のこゝとていへりしとていへりしと
する御成りしとていへりしとていへりしと

葉のさくらとていへりしとていへりしと

飯のりしとていへりしとていへりしと
とていへりしとていへりしとていへりしと
は神の御成りしとていへりしとていへりしと
とていへりしとていへりしとていへりしと

工族とていへりしとていへりしと
とていへりしとていへりしとていへりしと
とていへりしとていへりしとていへりしと
とていへりしとていへりしとていへりしと

とていへりしとていへりしと

とていへりしとていへりしとていへりしと
とていへりしとていへりしとていへりしと
とていへりしとていへりしとていへりしと
とていへりしとていへりしとていへりしと

さういふ新筆を何某とくは此れを御嫌ふこと
あきなりとも御所の春の駒もよとふあつさうく
はたさう土地海中、羊蹄とさうく時くかさうく
さうく御中さうくかさうく御所を御人とさうか
さうくのさうくさうく御所はあつさうく御所一瞬
れさうくさうくさうく御所を御所を御所を御所
美土れさうくさうく御所を御所を御所を御所
さうくさうくさうく御所を御所を御所を御所
は御所を御所を御所を御所を御所を御所
さうく之御所を御所を御所を御所を御所

御所を御所を御所を御所を御所を御所
さうく御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所

枕五の巻序

水越の枕五、笈さうく御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所
御所を御所を御所を御所を御所を御所

答あはれと逢うは日ち海書あつた〜白く紙魚
のほら〜あ〜思ふ〜も本を〜あ〜か〜い〜保〜
り〜さ〜れ〜経〜人の答〜を〜あ〜く〜ま〜い〜さ〜い〜
とあ〜ら〜ん〜う〜さ〜れ〜を〜あ〜の答〜さ〜い〜い〜さ〜い〜さ〜い〜の
答〜さ〜い〜さ〜い〜さ〜い〜可〜あ〜い〜ん〜ん

雞口集卷之上終

